

追録

異形交尾 快樂地獄

成人向



現実
は異な
った。



ある秋晴れの日
被いの依頼を受け一般の民家が
所有する蔵へと赴くことになった。

依頼の内容からして
危険は無いと判断し
見習いとして付けている
娘二人も同行させたのだが……



「後は私に任せて
あなたたちは早く
逃げなさい。」

そう言っ
て娘たちを
屋内から放り出し
彼女は内側から結界を張った。



蔵の中は女の胎を借りて繁殖する
低級ではあるが些か厄介な
異形の群れで満たされていたのだ。

彼女がそのことに
気づいたのは
娘三人が蔵の中へ
足を踏み入れて
しまった後のこと
だった。



彼女は扉を閉じる前に
泣きじゃくる下の娘を
安心させるため
今出来る精一杯の
笑顔を作って見せた。



この日に限っては
異形と戦闘になることを
想定していなかったため
退魔符の枚数も残り少ない。

つまり
元より異形を倒しきれず
算段など無かったか……

状況から
「こうすることが」が
最善だと判断し
覚悟を決めた。

窮地に追いやられた
自分を鼓舞するが如く
退魔師としての意地と
母の威厳を込めて
蠢く異形に向けて彼女は
言い放った。

『かかって来なさい!』

結局——奮戦虚しく退魔符もすぐに底をつき彼女は異形に絡め取られてしまった。

一瞬で身体の自由を封じられ手際よく衣類を剥ぎ取られる。

あとは予想通りの「準備」が粛々と進められた。

この屋内には異形が分泌する媚毒が揮発し充滿しつつある。

身体感覚が
変わって来ていることに
彼女は気づいた。

呼吸すること
に肺と脳へ成分が巡り
じきに全ての感覚が快楽で
埋め尽くされるのだろう。

文献で読んだ通りだったが
彼女自身が体験すること
になるとは夢にも思わなかった
——今日までは。

これから行われることを
はつきりと意識させるが如く
下腹部に繁殖器が当てがわれる。

あまりにも異質な肉塊に
彼女といえども弱気な感情が溢れた。



繁殖器をチラつかせ

彼女の注意を引いたところに
背後から「ずるん」と下着の中へ
イボ付き触手が侵入する。

完璧な不意打ちだった。

イボ付き触手はそのまま
びっちりと彼女の股間に
貼り付きながら前後運動
を始める。

それも一定の速さではなく
緩急をつけて角度を変え
時には焦らすように優しく
股間をなぞりあげる。

異形の知能が
如何程かは定かでないが

触手の所作からは
明らかに彼女を弄ぼうという
意思を感じ取れた。

ガツチリと脚を押さえつけられ
逃げることを許されない体勢で
じつくり念入りに
股間をブラッシングされる。

イボ触手が分泌する粘液には
当然の如く媚毒作用が有り
ひと擦りごとに秘部全体の
感度が高められていく。

異形は彼女の反応を見て「擦り方」を
学んでいるようにイボ触手の運動は
よりの確な角度、速さ、粘度になり
彼女の股間をねつとりと擦り上げる。

この先味わう異形の責め苦を想像する
には十分すぎる体験をしたところで
彼女はついに股間ブラッシングで絶頂を
刻まれる。

夫にも聞かせたことのないような
情けない声が漏れ出たところで
彼女の長い快樂地獄が始まった。



次に触手の標的になったのは彼女の豊満な胸だった。

異形の体にある大きな唇が開かれるとそこは溢れんばかりの媚毒粘液で満たされていた。

彼女が思考を回す間もなく胸を拘束していた触手が解け彼女の両乳頭は異形の大唇にむしゃぶりつかれた。

当然両乳首はたつぷりの媚毒に浸されることになる。

瞬間——乳頭を通して脳に強烈な快楽電流が流れ込む。

人間本来の性感帯を直接媚毒の原液につけられたのだ。あまりの快感に呼吸が荒くなる。

底から幾つかの小触手が伸び出てくるとそれぞれの乳頭を摘みあげ小刻みに擦り始めた。

先ほどの股間イボ触手ブラッシングで嫌というほど思い知らされた卓越した触手の愛撫。もはや声を我慢することは不可能だった。

ものの数分で夫との営みで漏れるような甘い吐息が回からこぼれ落ちる。

どれだけ拒絶の言葉を吐き出しても触手の動きは止まるはずもなく彼女は生まれて初めて乳首で絶頂する感覚を味わった。



一度絶頂したからといって
そこで触手の動きが止まる
はずもなく——媚毒の粘液を
潤滑油にして彼女の両乳首を
徹底的に磨き上げた。

結果——彼女の乳頭と乳輪は
パンパンに膨れ上がり
もはや空気に触れているだけで
甘イキしてしまうほどに
感度が高められてしまった。

異形が母体へ徹底的に快楽を
与え続けることには理由がある。

異形の繁殖には膨大な霊力が必要となるが
母体が幸福感を得ている時が最も霊力を
奪いやすい状況になるという。

そういった理由から
異形は母体を快楽漬けにし
出産するときの苦痛ですらも
余すことなく快楽へと変換し
食欲に霊力を吸い尽くす。

彼女は助けが来るまでの7日間
女盛りの熟れた肉体に人間が
一生で味わうはずもない量の
快楽を叩き込まれることになる。

母体の下ごしらえを十分に
終えた異形は満を持して
交尾に向けた準備を始める。

異形のソレは彼女の眼前で
より最もらしい凶悪な形へと
姿を変えていく。

人のソレと大きさが全く
異なるのは言わずもがなだが
カリ首が多層に連なっており
更に重なり隙間からあの粘液が
絶え間なく滴り落ちている。

変態を終えた繁殖器が
ついに股座にあてがわれる。

これまでの
執拗な媚毒快樂責めで
受け入れ準備は否が応でも
整ってしまった。

拒絶の言葉が喉元まで
登りつめたが……
彼女は覚悟し——飲み込んだ。

異形の繁殖器は
すんなりと彼女の
股座を貫いた。

散々昂らされたカラダは
一切の苦痛も感じることなく
強烈な快楽だけが彼女を支配した。

異形の連続カリ首が
腔内の隅々までねつとりと
ほじくり返していく。

「腰使い」という形容が
正しいのかはわからないが
まるで熟練の竿師の如く
腰さばきで彼女の泣き所を
的確に引っ搔いていく。

羞恥心を煽る
大股開きの
体勢で拘束され
途切れることなく
抽送運動が続く。

なんや
それはあり

人ならざるイチモツの
人ならざる動きが生み出す
人知を超えた快楽が
彼女の脳を焼いていく。

彼女の留守になっていた両乳に
ヒトデ型の触手が食らいつく。
乱暴に揉みしだかれ
粒突起がびっしりの舌触手で
媚毒粘液をまぶされながら
両乳首をじゃぶりまわされる。

極上の乳快楽に
腹の底から出た低い嬌声も
最後は鼻にかかったような
声にもならない音になって
かき消えた。

りゅるるる

絶え間無く分泌される
媚毒につつまれた
多層カリ首に狂わせられる。

向きを変え
角度を変え……
膣内を絶え間なく
徹底的にほじくり
回され続ける……

抽送三掻き毎に
先ほどまでの絶頂で
刻まれた快楽とは
比較にならないほどの
エクスタシーが雪崩れ込む。

揮発した媚毒の影響で
呼吸すら彼女の快楽中枢を刺激する
喘ぎ声を漏らせば声帯の震えて
鼓膜の振動で甘い刺激が襲ってくる。

快楽で快楽を上塗り
される快楽地獄。

そして——
とうとう
その時が訪れた。

カリ
カリ
カリ
カリ
カリ
カリ
カリ
カリ





射精と同時に強烈な快楽を
脳髓に叩き込まれた彼女は、
しばらく絶頂の波から
抜け出すことが出来なかった。

繁殖液を出されてしまった絶望と
至高の快楽の狭間で彼女は
泣きながら絶頂に達し続けた。

異形の繁殖液は
母体の排卵を強制的に誘発し
確実に受胎させる。

即ち——彼女が異形の
母になった瞬間だった。



異形は彼女を孕ませたことを
鼓舞するかの如く生殖器を
彼女の顔前に突き出した。

そして——それに呼応するように
ぬらぬらと別の個体の繁殖器が
彼女を取り囲み始める。

異形の母親に休みなど
ないことを知り
切れ目なくあの快楽を
味わい続けるのだと悟り
恐怖した。

彼女は朦朧する意識の中
心の中で呟いた。

『あなた…助けて…』





結局——彼女が器としての
役目を終えるまで蔵の扉が
開くことは無かった。

彼女が施した結果は
頑強かつ完璧であった為
外側からこじ開けられる者は
誰もいなかったのである……

彼女の霊力を異形が全て
貪り尽くしたと同時に
ようやく結果が解けた。

彼女が有能な
退魔師であったが故の
悲劇だった……



彼女は7日間で合計108体の
異形を産み落とした。
そのうち90体は
既に結界の力で死滅していた。

残りの18体のうち9体は
彼女の救出する際に助けに入った
退魔師たちにもその場で滅せられたが
あとの9体は逃亡
闇の中へと消えていった……

救助に入った夫と対面した
彼女の表情は恐怖でも憔悴でもなく
恍惚と呼ぶのが相応しい様子だった。

結んでいた髪は解けて乱れ
彼女の表情と合わさって
妖しげな艶を演出している。

これは彼女がこの7日間
切れ目のない快楽に
どっぷり漬け込まれていた
ことを物語っていた。

彼女の乳輪は色濃く変色し
両乳首はパンパンに膨れ上がっている。
乳房自体の大きさも二回りほど大きく
なっているだろうか……
異形たちのおもちゃにされ
徹底的に遊び尽くされたことは
目で見て明らかだった。



以上が須美平様より
ご提出いただいた
手記及び救助班の証言より
作成した回顧録になります

内容
相違ありません
でしょうか？

ええ…
概ね
7日間すべてが
記載されてる
わけでは無いのね

はい——今回は
ここまでです

より詳細な記録は
順を追ってまとめていく
ことになります

ですので
引き続き
ご協力のほど
よろしくお願
いいたします

……
わかったわ

それでは

本日の施術準備が
整いましたので
お部屋にお入りください

施術師二名
治療に向けて
精一杯のお力添えを
させていただきます

回顧録ノ一へ



では
本日もよろしく
お願い致します

よろしくね……



一日目……

わかったわ……



今日は
スマカ様が体験された
『一日目』の出来事について
もう少し詳しく聞かせ
ただけたらと思います

よろしい
でしょうか？



お身体
楽になりました
でしょうか…？



そういえば

前回の施術は
いかがでしたか…？



幾分かは…
ね……

それは
良かったです

今日はお話を
聞かせていただく
だけですので
早速始めて
いきましよう

……
わかったわ

ええ……



えっと…

一日目ね…

はい

確か…そう…



繁殖液を出されたあと
そのまま『その行為』が
続くかと思つた
のだけど……

朦朧とした意識から回復
すると胸を強調するような
格好で拘束されていたの……

しばらくすると頭上から
ぬらぬらとテカリを放つた
繊維毛ブラシのような触手が
垂れ下がってきた……
それが『どこ』を
目指しているのかは
すぐわかつたわ……

ただ……
四肢をがっちり固定され
快樂の余韻からまだ完全に
抜け出せていなかった私は
『それ』が到達するのを
ただ見ていることしか
出来なかつた……





纖毛触手は
両胸に到達するや否や
そのまま乳首を中心に
ねっとり両胸を
舐り回したわ！

一度媚毒粘液に
漬け込まれ
感度が高められた
両胸にはもう
たまらなかつた！



勢いよく擦り
上げられた瞬間
ようやく
この凶悪さを
理解できた……

強烈な快感が叩き込まれ
当たり前のよう
に乳首で絶頂させられた



本当に責め方が
いやらしかった
容赦ない責めが
続いたと思いきや
乳首を掠めるような
甘責めを
されたりもした……

繁殖とは
まったく関係ない
両胸を嬲られる行為
今思うと本当に
ただのおもちゃに
されていたと思う
私の反応を見て
愉しんでいるかの
ようだった



容赦無い責めの中でも
最悪だったのが
ドリルのように回転させ
乳首を中心に両胸を
ほじくられる行為……

じつとりした
甘責めで焦らされたあと
これをやられる……
本当に
はしたない声を
上げさせられながら
何度も絶頂させられた！
何度も……何度も……

最終的に快感で足腰立たなくなってもまわりの触手に無理矢理身体を起こされて…
磔にされて…
餅をこねるかのように執拗に胸を弄ばれ続けたわ…

『この触手でのイキ方』はこのとき完全に覚え込まされたと思う

ほんと意思でもあるのかしら
胸への執着が
強かった

イカされすぎてゆるくなつてしまっていたのか
異形の粘液で体質が
変えられてしまったのか
わからないけど…
『下』を弄られてもいないのに
勢いよく潮吹きを繰り返して
いたわ…
途方もなく…
胸髑られて潮吹きを繰り返すだけの
おもちゃにさせられていたわ…

異形の胸責めが一段落したところで
ひたすら快感を浴びせられて
脱力した身体を抱え上げられた

異形が私を運ぶ先には
一体の異形が変態した姿
肉イボまみれの洗濯板……
とても言うのかしら……

肉イボの
隙間からは
あの媚毒粘液が
絶え間なく分泌
されているのが
すぐわかったわ……

そして……
そこで洗われるのは
『私自身』だという
こともね……

どよ……



触手に身体を半分
抱えられながら
股間をイボ板に
押し付けられて
身体ごと前後移動
させられる...



行くも地獄
戻るも地獄

私をは触手に
身を預けな
移動に合
ただひに
情けな
あげな
出な
来な
か
と
し
か

ひとしきり
前後運動が終わった後
いままで板だったモノが
ぱっくり折れて
私の身体を挟み込んだ

しかも今まで
微動だにしなかった
肉イボが積極的に
振動し始めたの
本当に最悪な
肉イボサンドイッチ
だった……

この時までに味合わされた
触手責めはほんの序の口
だったと思いきや知らされたわ
人間って
快楽の許容量を超えると
声出なくなるのね……



これで胸と秘部の他に
お腹と背中：それにお尻も
性感帯にさせられたわ

肉イボベツドに
うつ伏せになったまま
しばらくは痙攣が
止まらなかった

ようやく声が出るようになって
余韻が治ってきたことがわかった
それくらいもう頭の中が快楽以外
何も無くさせられていたの

あとはもう
ダメ押しと
言わんばかりの
ピストン運動ね
しかも多量の媚毒成分を
含む繁殖液を絶え間なく
吐き出されながら
もうなんでも
有りかって感じよね
何としてでも
私を妊娠させる
気迫というか……



これに強烈な快感が下腹部を
襲い始めたんだけど
徐々になんか
いい感じになってる
今思えば
あれはあるはずの
ない子宮の快楽
だったのだと思う



出産までの過程は
ほとんどにあっけなく
終わったわ……

特に体調に異変を
感じることも無く
瞬間にお腹が
膨れ上がってきた……

もちろん恐怖も
あったけど……
それですぐに
快楽でかき消された……

身体はがっちり
触手に固定されて
胸にはビトデ型触手が吸い付き
回にも触手を咥え込まれた

膨らんだお腹を
触手が撫で回すのだけど……
本当にそれがたまらなくて……
肉イボサンドイッチで
性感帯にさせられてしまった
情けなさで震えながら
絶頂したわ……

フーッ

おっ

んっ

フーッ

フーッ

いゅる

いゅる

いゅる

異形の出産は苦痛など皆無で
媚毒が全身に行き渡っている
私の身体には強烈な快楽が襲ったわ

全身に
絶え間なく快楽を
浴びせられ続けて
いたのは
そうなのだけど……
普通の……
『挿入される快楽』
じゃない
『味わうはずのない
排出する快楽』……

これは……
本当に味わっては
いけない快楽
だったんだと思う

合計5体の
を排出し……
初めての出産を
終えたわ

この時の私に
残っていたのは
甘く脳を焼く
出産の快樂だけ
だった……

最悪ね……
一日目は以上よ……

御巫須美乎
快樂地獄一日目
異形出産数五体
ニテ終了

御巫須美乎 ミカナギスミカ

35歳

代々退魔業を営む御巫家の長女。

家族構成は
婿養子の夫38歳
14歳と9歳の娘が2人。

天性の才能と、努力で
培った腕前を持つ歴戦の
退魔師ではあるが、今回は
数が多すぎた上
想定外の邂逅による
装備不十分が敗因であった。

【後日談】

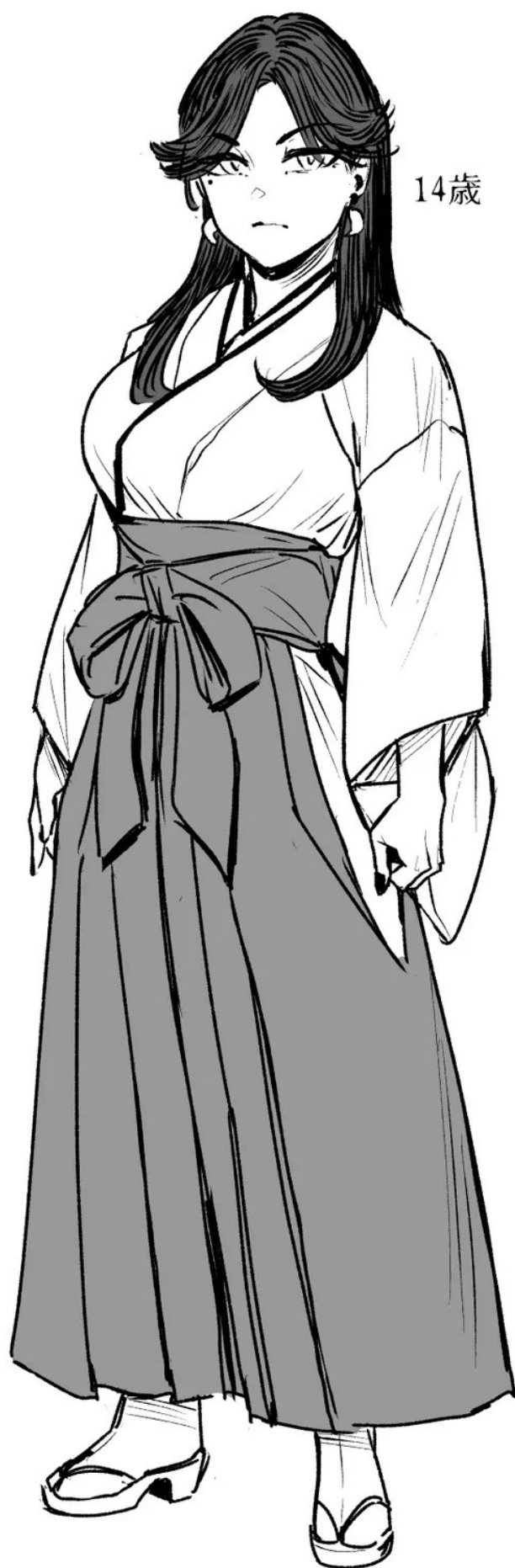
彼女は順調に回復し
半年後には普通の生活に
戻ることができた。
ただ、家族、特に娘たちには
悟られないように気丈に
振る舞っているが
あの7日間の出来事は
彼女の心とカラダに
大きな爪痕を残してる。

週毎の決まった夜更けになると
彼女は退魔師の総本部へ
出かけていく。
そこで心とカラダの治療を
受けているのだという。
彼女が家に帰るのは決まって
翌朝になるそう。



娘2人

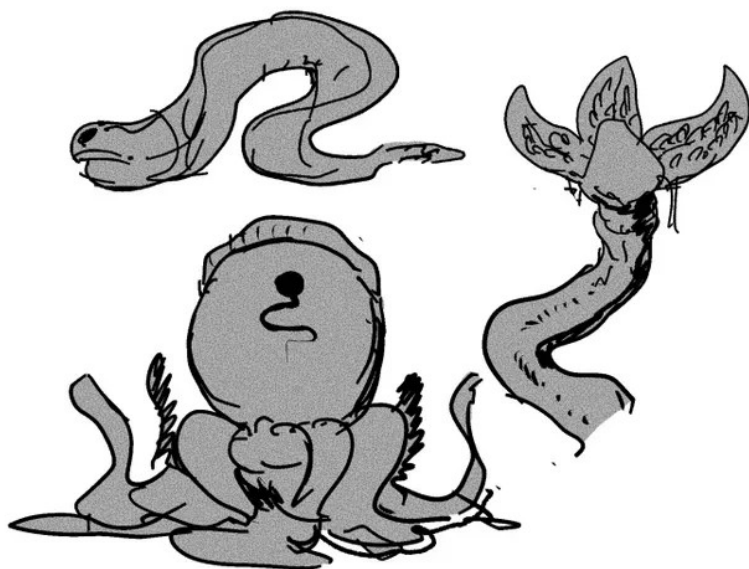
2人の出番があるとすれば須美乎本編から10年後の話
とかになるかと…





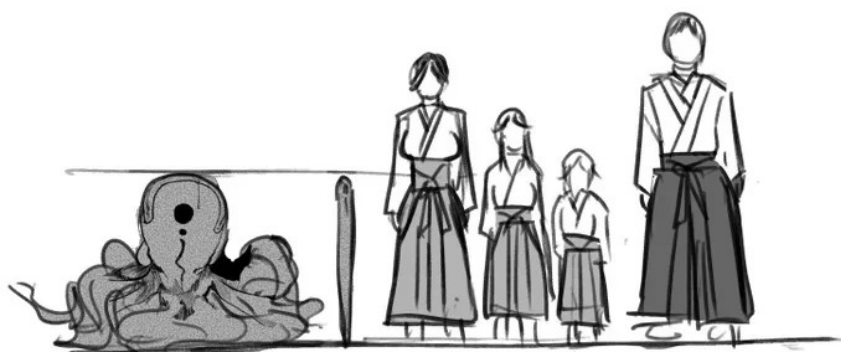
異形一孕魔蟲ハラマムシ

女の胎を借りて繁殖を行う異形の一種。



幼体はうなぎのような形をしているが、成体になるとタコのように複数の足を持つ形へと変態する。複数ある足は伸縮自在であり、徒党を組んで母体となる獲物に絡みつく。

体にある大きな唇のようなものの内部には繁殖に使用するための強力な媚毒を常に分泌している。また、繁殖器や女体の快感を昂らせる様々な触手に関してもこの内部に収納されている。



成体 幼体 娘 男

媚毒は女を籠絡するための秘薬の原料としても重宝されており、近年では営利目的で家畜として飼われているケースも報告され始めている。異形の畜産はもちろん違法であるため、人目につかない山奥の廃屋などで行われるのだとか。

七日間後の姿



御巫須美乎 ミカナギスミカ

35歳

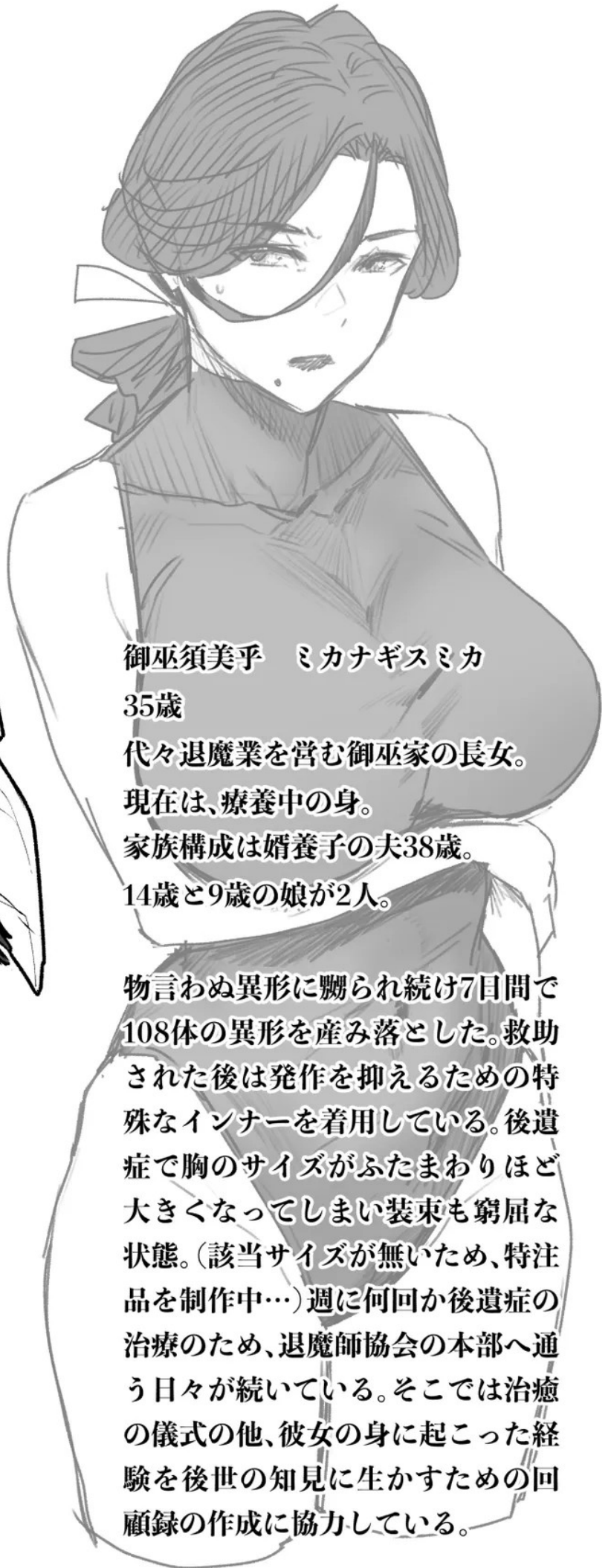
代々退魔業を営む御巫家の長女。

現在は、療養中の身。

家族構成は婿養子の夫38歳。

14歳と9歳の娘が2人。

物言わぬ異形に嬲られ続け7目間で108体の異形を産み落とした。救助された後は発作を抑えるための特殊なインナーを着用している。後遺症で胸のサイズがふたまわりほど大きくなってしまい装束も窮屈な状態。(該当サイズが無いため、特注品を制作中…)週に何回か後遺症の治療のため、退魔師協会の本部へ通う日々が続いている。そこでは治癒の儀式の他、彼女の身に起こった経験を後世の知見に生かすための回顧録の作成に協力している。





退魔師本部 書記

須美乎の回顧録作成担当。
その他、彼女の本部での諸々の
調整役も兼ねている。



回顧錄構想



IF親子異形苗床図へ

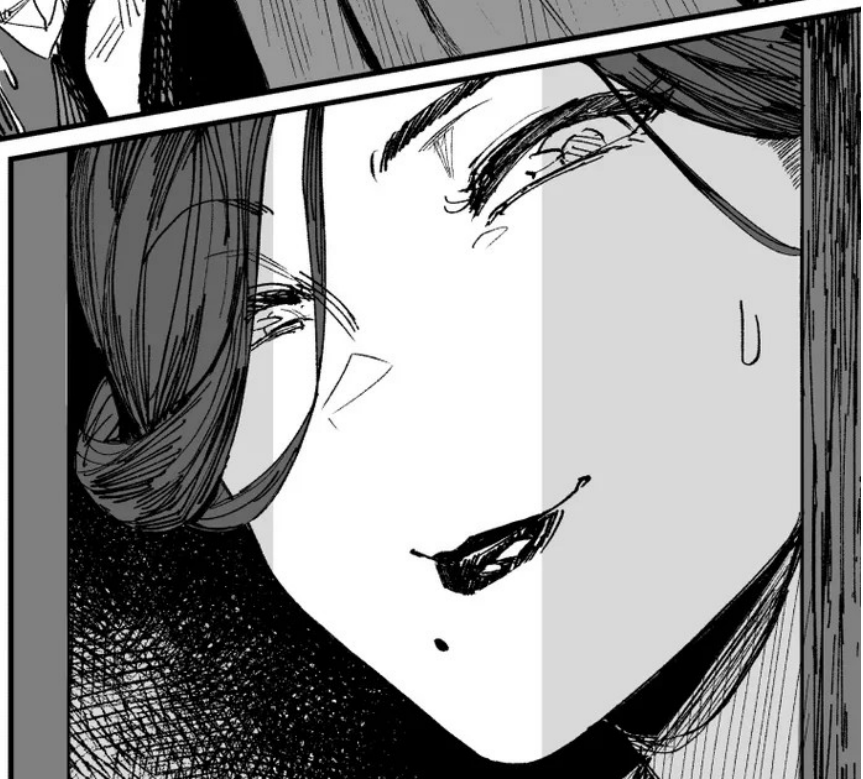
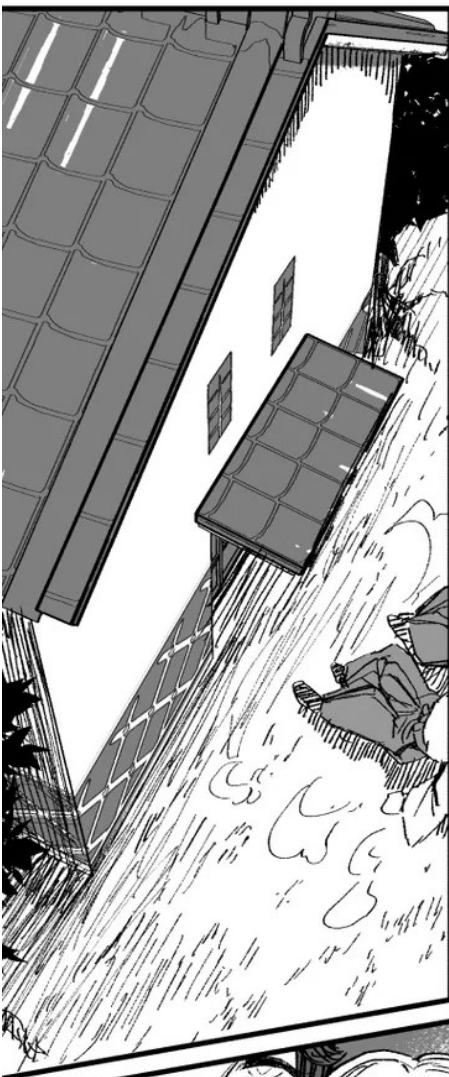
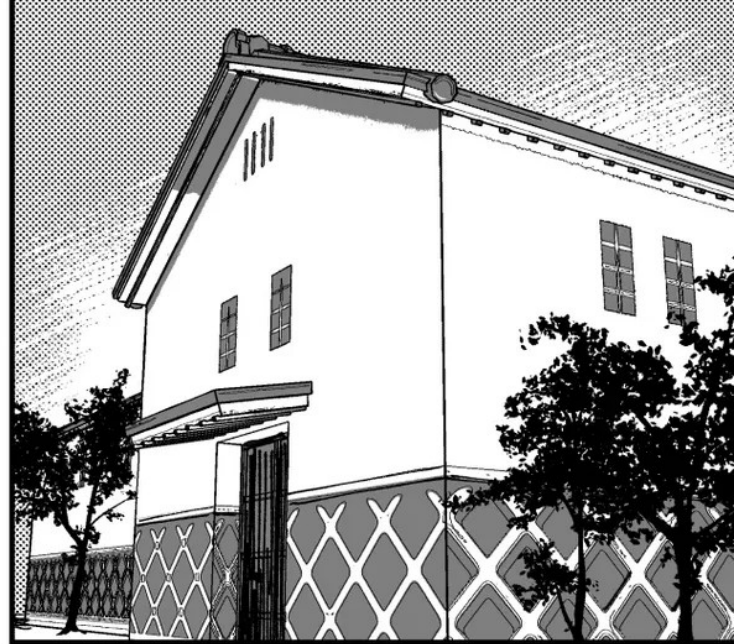




追録・異形交尾快樂地獄



アイソカーフ







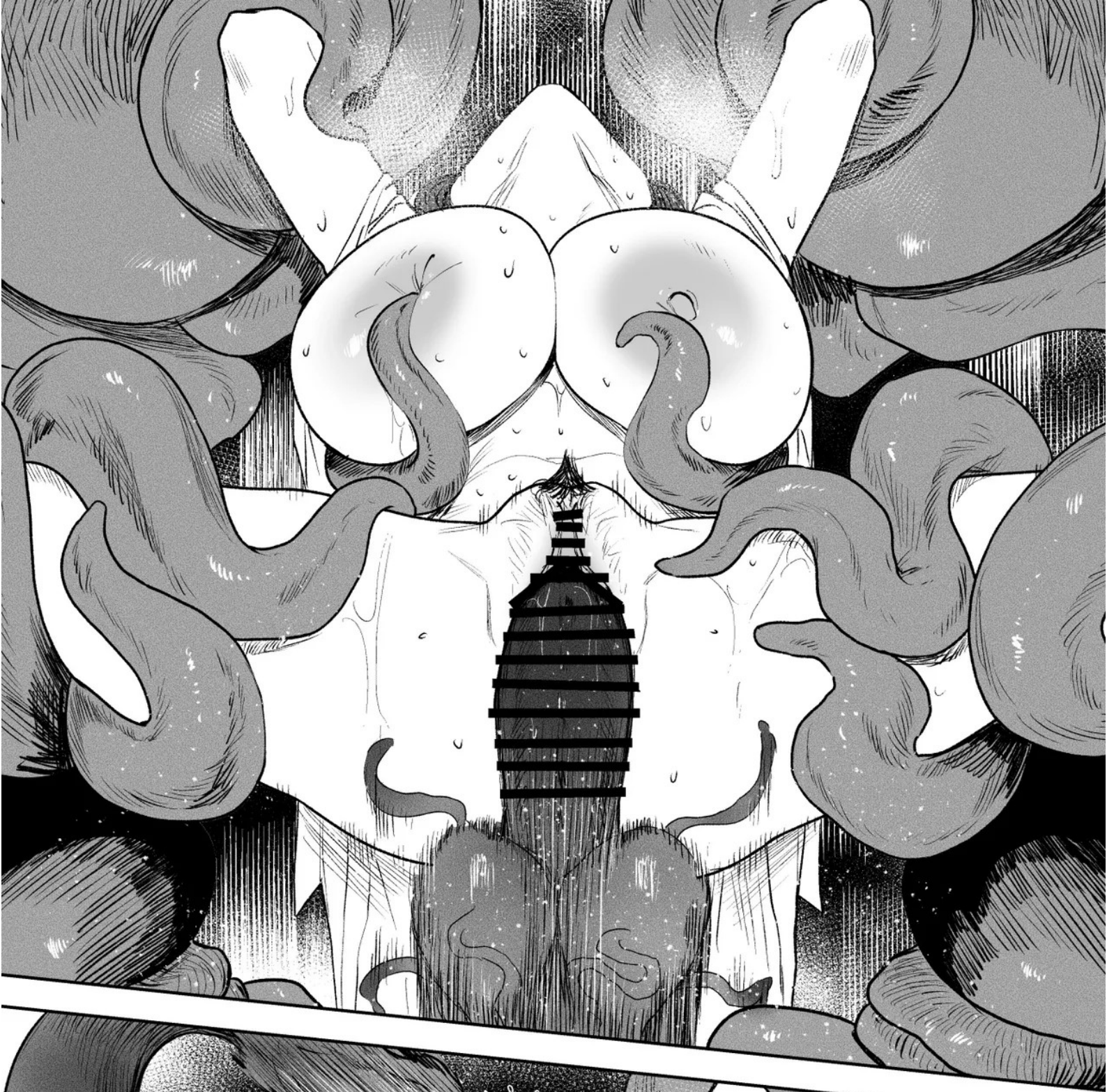




















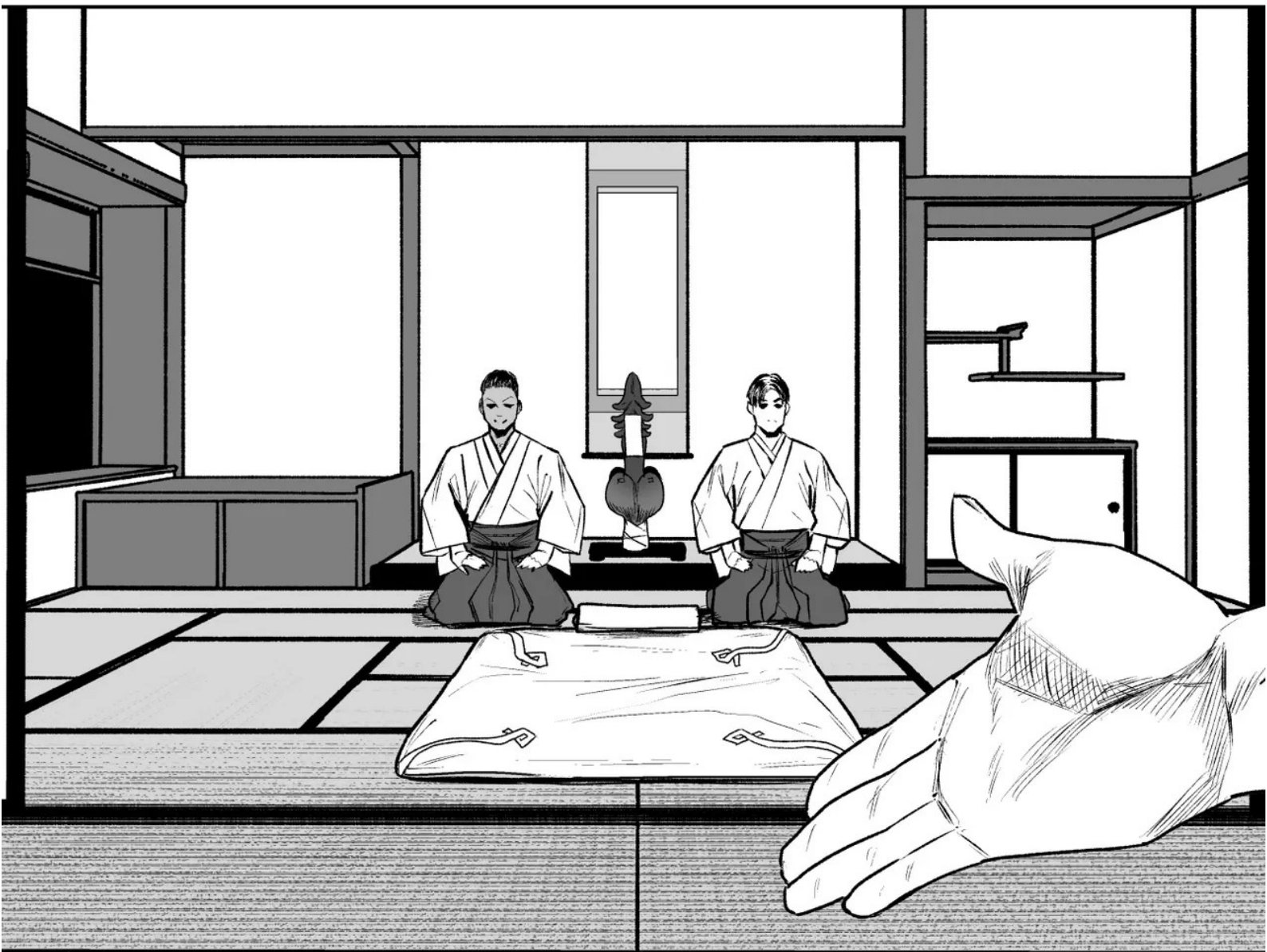












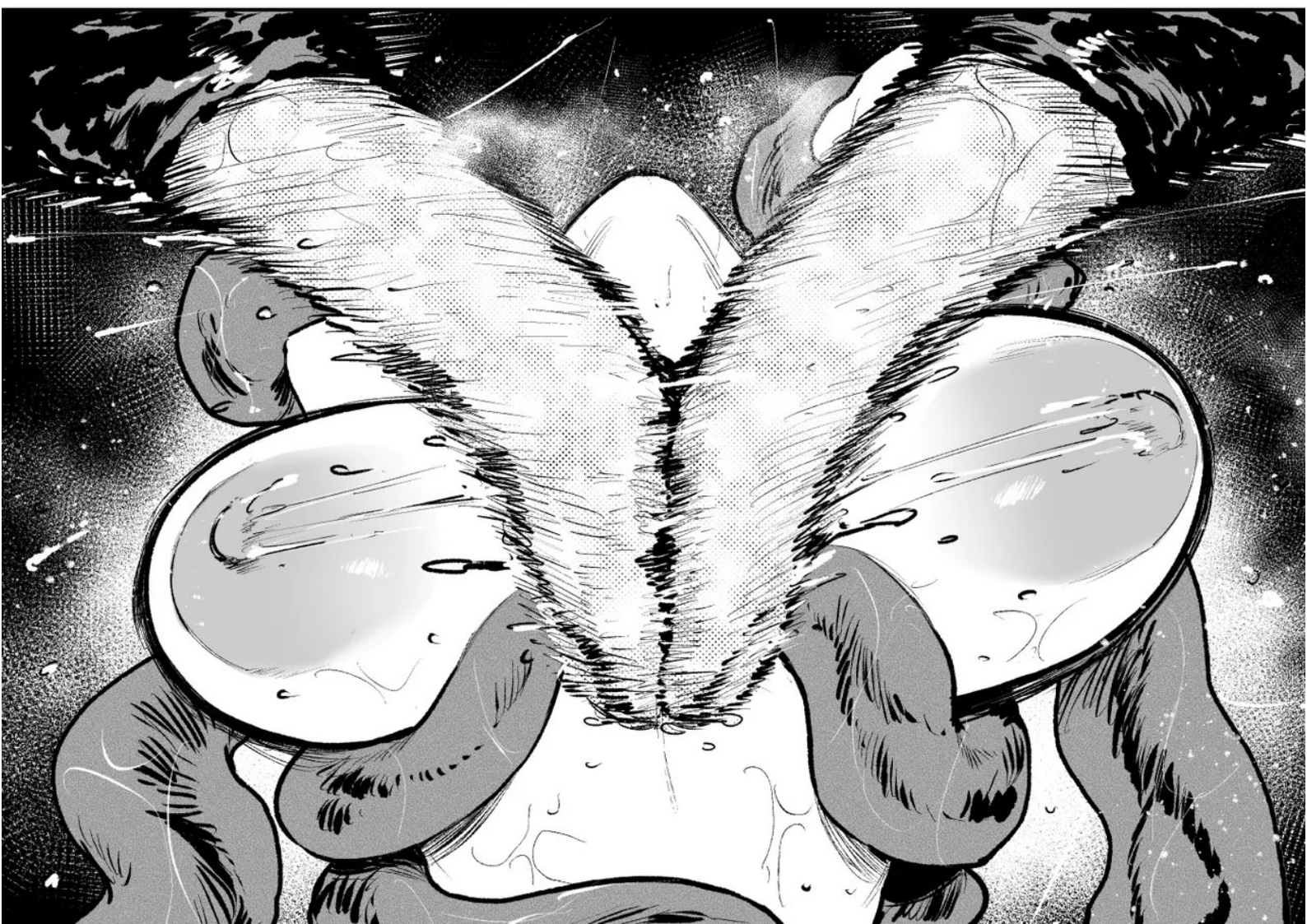
回顧録ノ一へ







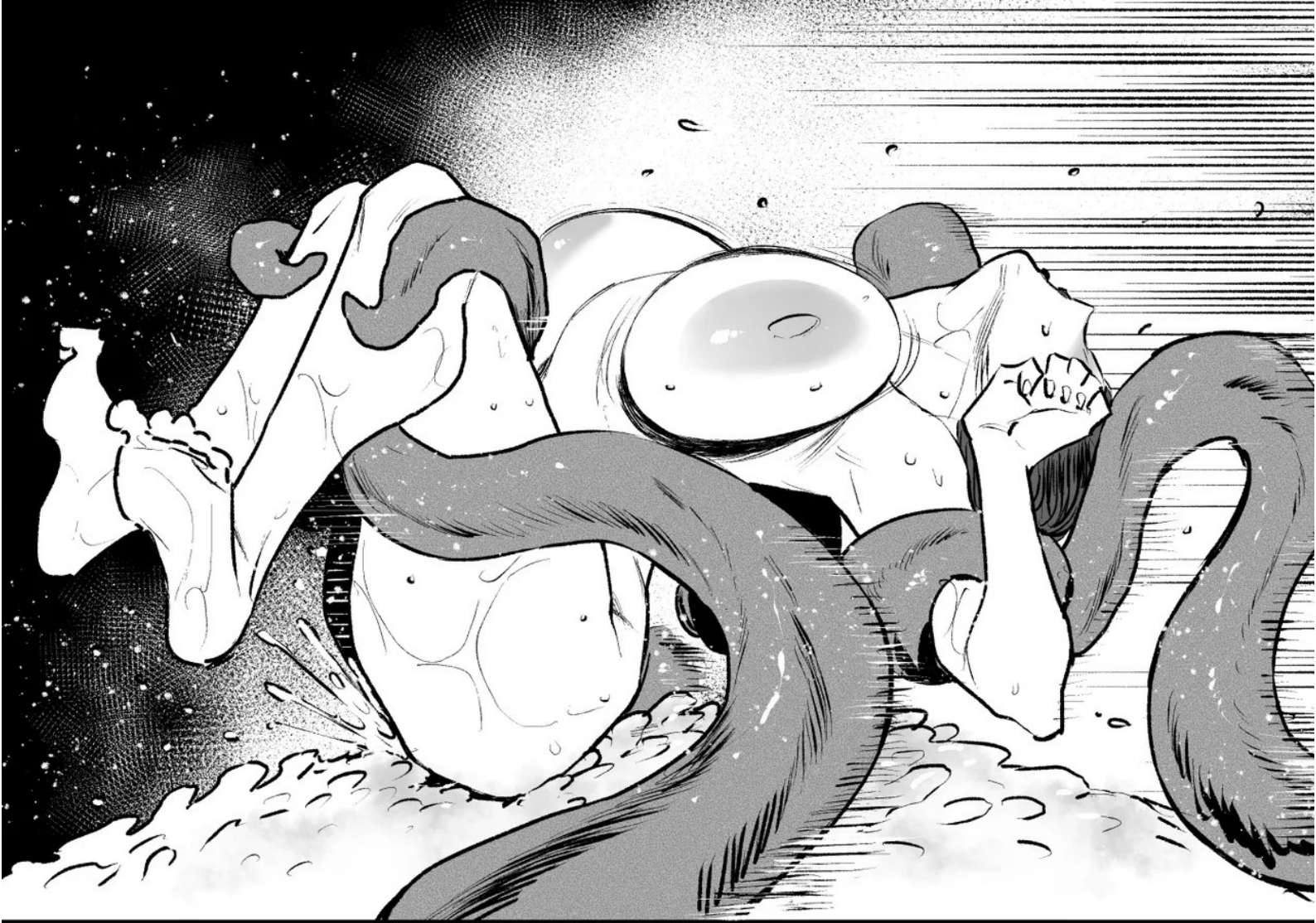








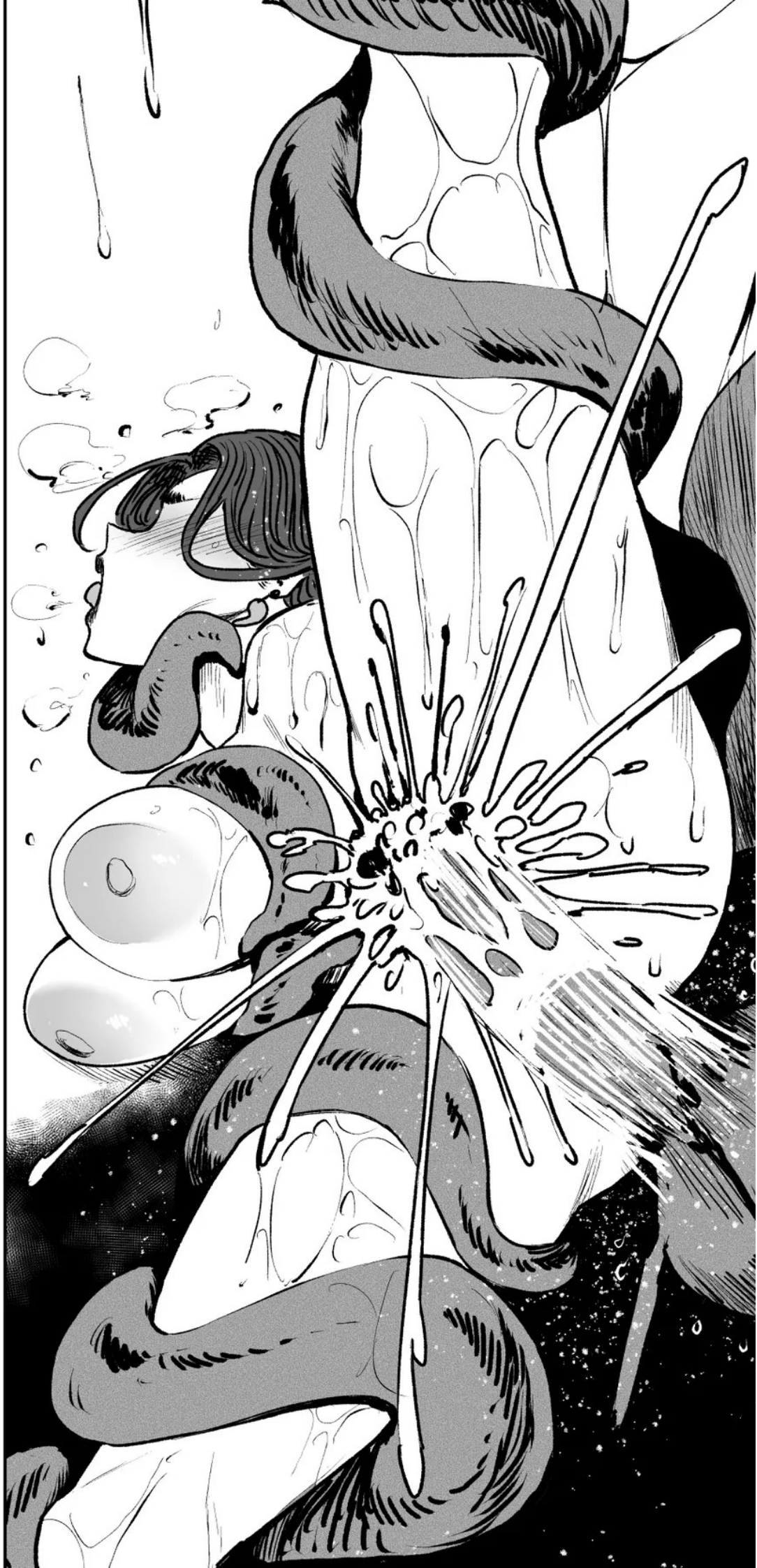


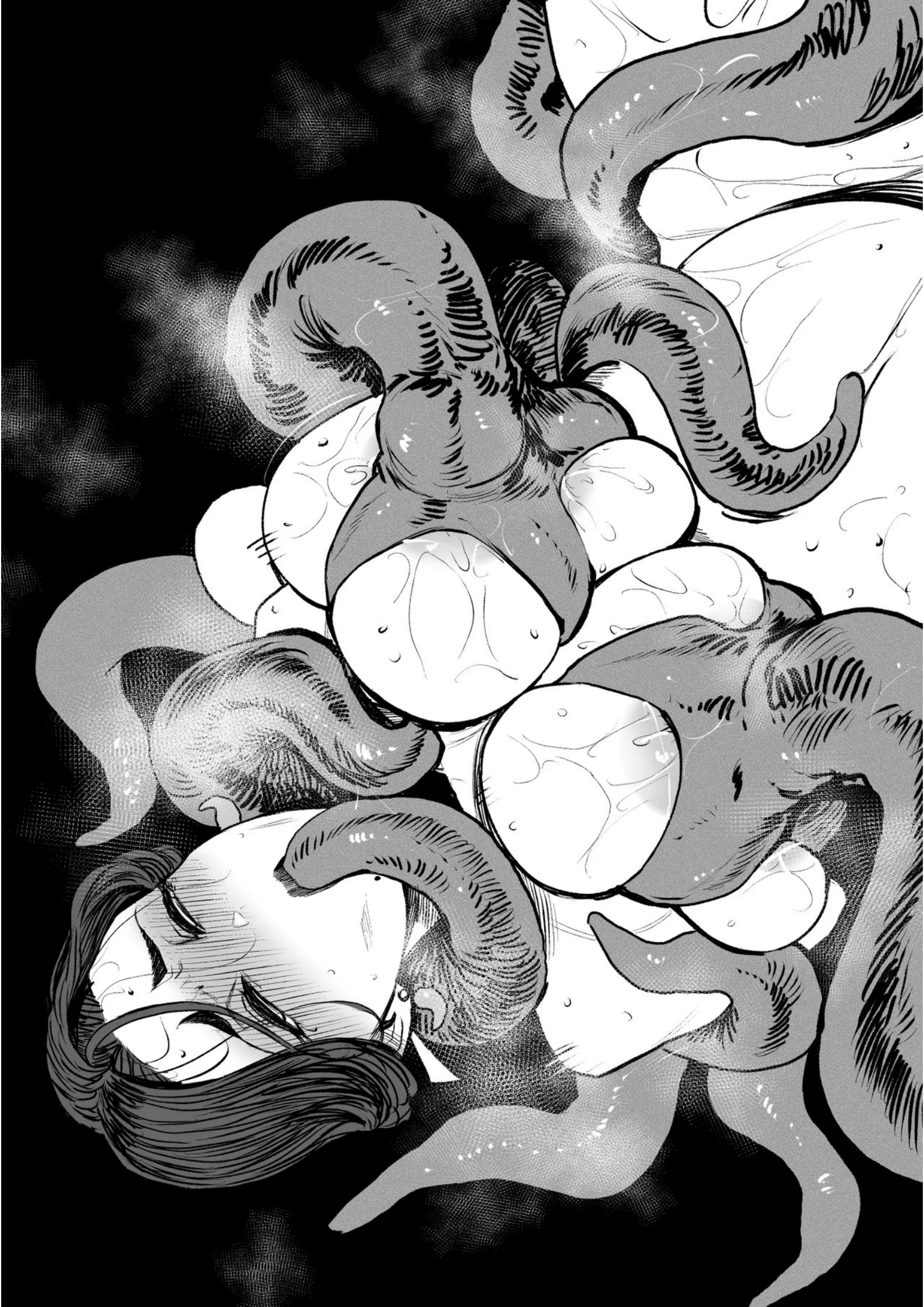




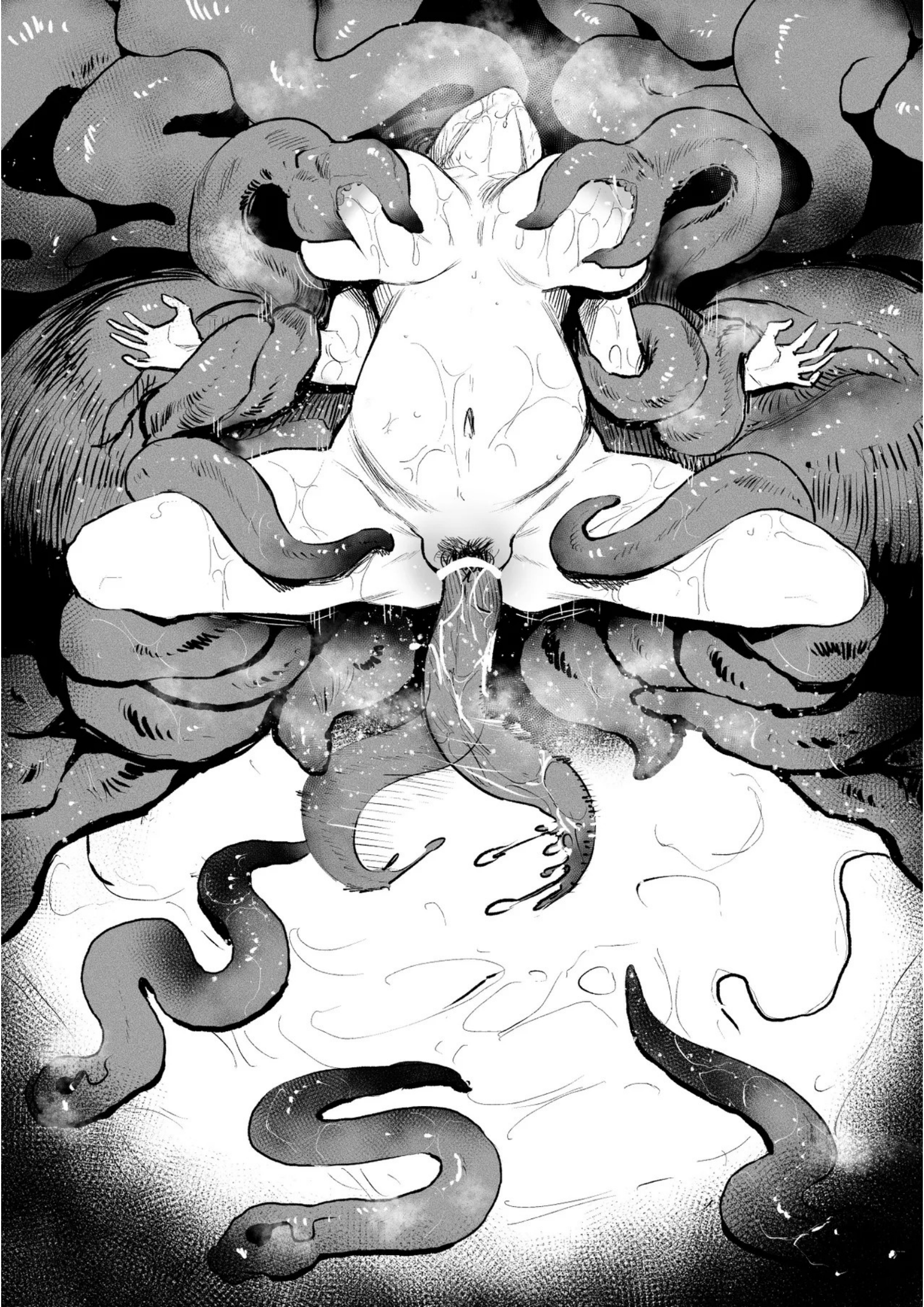














IF親子異形苗床図へ



